

フロイト『機知』とジャック・ラカンにおける「隠喩」の機制

東京大学 花澤創一郎

はじめに

フロイトの『機知』(1905)はラカンが最も重視したフロイトの著作の一つである。『機知』をめぐるラカンのユニークな読解がその一旦の完成をみるのは1957-58年のセミナー第5巻『無意識の形成物 *Les formations de l'inconscient*』であり、1950年代のラカンの思索を理解するためにはこのセミナー(まで)の議論を詳細に検討する必要がある。我が国にはこのセミナー第5巻に関する先行研究がいくつか存在するものの、それらの研究は必ずしも対話的に蓄積されてきたとはいいがたい。本稿では、『機知』の読解を通じてラカンが作り上げた言語理論のうち「隠喩 *métaphore*」に焦点を合わせ、これに関する先行研究の諸解釈と布置を整理するとともに、セミナー本文の再読解を通して隠喩の機制をより厳密かつ整合的に解釈することを試みる。なお、具体的分析をくわえる隠喩の事例として、本稿ではシニョレリ *Signorelli*、アテレ *atterré*、ファミリオネール *famillionnaire*、眠れるボアズ *Booz endormi* の四つの隠喩例を対象とする⁽¹⁾。

第一節では、先行研究の概観とその批判的検討を行う。

第二節では、上に挙げた四つの隠喩の事例について、それぞれの具体的分析とその機制の整理を行う。

第一節 「隠喩」に関するこれまでの議論：先行研究の批判的検討

Blanco (2002) はフロイトの『機知』とラカンのセミナー5巻の議論の全体を概観しており、その過程でシニョレリ、アテレ、ファミリオネール、眠れるボアズが言及されている。重点的に解釈が加えられるのはシニョレリとファミリオネールであるが、本稿の解釈との違いが浮き彫りになるのは特に「換喩 *métonymie*」に関してである。その詳細な分析を行う余裕はないが、端的に言えば、Blanco は音の似ている語の関係を総じて「換喩」として扱っているように思われる⁽²⁾。我々はのちに述べるように、ヤコブソンの失語症論文の換喩論を強くとして統辞的な繋がりを換喩的關係としてみる。ただし、Blanco はヤコブソンの議論を無視しているわけではない⁽³⁾。

原和之 (2002) はラカンがバンヴェニストとの交流から得た「シニフィカシオン *signification*」の定義、すなわち「可能な用法の集合」という観点から、ファミリオネールとアテレの事例を紹介している。原によれば、通常の言語運用ではシニフィアンの選択は、より大きな水準(文字から語へ、語から句や文へ)における諸用法(シニフィカシオン)の可能性を開いていく。しかし、機知においては「むしろ下降的に、シニフィカシオンがシニフィアンを規定する⁽⁴⁾」、あるいは「シニフィカシオンがシニフィアンを再規定、ないし解体=再構築したのである」と言われる。しかし、次に見る川崎(2007)も強調しているように、ラカンは機知のプロセスをシニフィアン操作の水準で考えているため、原の解釈はラカンの記述とは対立する。

原はファミリオネールの機知を解説するにあたってヒアツィントの抱く不信感を「先行的なシニフィカシオン」と呼んでいるが、ヒアツィントははじめからそのような不信感を抱いていたわけではない。ファミリオネールという機知は一種の錯誤行為の産物であり、ヒアツィントがこの言葉を創造することに先行してシニフィカシオンが存在するわけではない。もっとも、シニフィカシオンを「可能な用法の集合」と捉えるならば、シニフィカシオンがシニフィアンを規定するという事態を、既存の用法から逸脱した新たな用法

がシニフィアン（の形）を規定する、と考えることもできる。しかし、そうであればヒアツィントの不信感を「先行的なシニフィカション」と呼ぶ原の（「シニフィカション」の）用法は、一貫していないように思われる。

川崎惣一（2007）は、フロイトに対するラカンの解釈のある種の強引さを指摘して、ラカンによる機知の理論があくまでもシニフィアンの次元で展開されていることを強調する⁽⁵⁾。「マヨネーズをかけた鮭」の機知で生じている「移動 *Verschiebung*」の技法について、フロイト自身は「言語的表現にはほとんど依拠しておらず、それは言葉にではなく、思考過程に依拠している」と述べている（GW-VI, 53）。それにもかかわらず、ラカンは「フロイトの与えた説明を詳細に検討することなく、この機知がアクセントを変えることによって成り立っており、これは、機知の表明がシニフィアンを介することによって生じるのだ、と主張して、自らの理論的枠組みのなかで捉え返している⁽⁶⁾」。フロイトの記述を無視してでも機知の技法を全面的にシニフィアンの次元での操作に還元しようとしている、という川崎の解釈は、「シニフィカションがシニフィアンを規定する」という原の解釈と対立する。

川崎はまた「隠喩」の機制について、シニョレリとアテレの事例を平行に分析している。川崎は、二つの分数の掛け算というラカンが用いた表現方法に沿ってシニョレリの機知を説明している⁽⁷⁾。われわれの考えるところでは、川崎の説明はラカンの記述に即しているとは言えない。第二節で見ると、シニョレリにおいては隠喩的創造が行われなかったのであり、ラカンが示した図においては分母にある「Signor」の上（分子）にはそのことを表す「X」が置かれている。しかし川崎は『Signorelli』というシニフィアンの下にシニフィエとして『シニョール Signor』が入⁽⁸⁾ると述べる。また、川崎は『Herr』が抑圧された⁽⁹⁾と述べているが、抑圧されたのは「Signor」であり、「Herr」は「禁圧 *unterdrückt*」されたものである（cf. 2-2）。さらにラカンは「Signor」の抑圧と「Signorelli」の忘却を明確に区別しているが、川崎の記述にはその区別が見られない。川崎は全てを「抑圧（＝消失）」によって説明しており、「抑圧」「禁圧」「忘却」の区別をしていない。

また「アテレ」の例についても、『アテレ』に『恐怖』という暗黙の（抑圧された）ニュアンスが付け加わることになる」と言われるが、ラカンの記述に則せば抑圧されたのは「terre」である。また直後に『アテレ *atterré*/テール *terre*』が『テール *terre*/恐怖 *terreur*』に置き換えられ⁽¹⁰⁾とあるが、「*abattu*」が「*atterré*」に置き換えられるというのが正確である。全体的に、川崎の説明はラカンの記述を精密に捉えたものとなっていない。

片山文保（2012）はファミリーオネールの機知について、抑圧された要素である「*famille*」をフロイトの「単一化 *Unifizierung*」概念における「共通の第三のもの」と解釈し、また隠喩の機制を「対象 a」や「S1-S2」といった年代的にはより後の概念を用いて説明している。この時期（1957-58 年）のセミナーの議論を、年代的に後の概念を用いて解釈するというアナクロニスムについては措くとしても、片山もまた川崎と同様に「抑圧」「禁圧」「忘却」を区別していないために、隠喩の機制について踏み込んだ精密な分析には至っていない。

ファミリーオネールの機知を分析した節の最後に片山は、「*famillionnaire*」が S2 にあたり、「*famille*」は S1 にあたると述べている⁽¹¹⁾。だが、この記述は同じく片山が注の中で述べている解釈と異なっている。片山は注 14 の中でシニョレリの例についても解釈の見通しをたて、ここでは分数定式を用いて、この分数の掛け算を「 $(X/S2) \cdot (S2/S1)$ 」と考えている。そして、S2 に

は「Signor」が置かれ、S1には「Herr」が置かれると説明しているため⁽¹²⁾、これを定式化すると「(X/Signor)・(Signor/Herr)」となる。しかしながら、その直後に続くファミリオネールへの定式の適用において、片山は「X」の位置に置かれるのが「famillionnaire」であり、「familier」あるいは「famille」がS2に、「millionnaire」がS1に置かれると述べる⁽¹³⁾。これは片山が論文の本文で行っていた、「famillionnaire」と「S1-S2」の対応関係とかみ合わない。

第二節 「隠喩」の機制の再構成

2-1 隠喩の分数定式

隠喩に関する以上に示した混乱をふまえて、われわれは改めてラカンの記述に即してその定式を再構成しよう。二つの分数があり、そこで掛け算が行われる。ラカン自身が明示している分数定式はシニョレリに関するもののみであり、「(X/Signor)・(Signor/Herr)」となっている(S.V, 59)。「Signor」が抑圧されるということが、分数の掛け算における約分として表現されている。したがって、(左から)一つ目の分数の分母および二つ目の分数の分子が、抑圧される(＝約分される)同一の要素だということになる。これを、その他の例であるファミリオネール、アテレ、眠れるボアズにも適用すると、それぞれ次のようになるだろう。

ファミリオネール：(famillionnaire/familier-famille)・(familier-famille/?) = (famillionnaire/?)

シニョレリ：(X/Signor)・(Signor/Herr) = (X/Herr)

アテレ：(atterré/terre)・(terre/terreur) = (atterré/terreur)

眠れるボアズ：(彼の麦束/ボアズ)・(ボアズ/?) = (彼の麦束/?)

表記に関して二点述べておく。第一に、「familier-famille」という表記は、「familier」と「famille」が区別されずに扱われていることを意味している。ラカンは、ファミリオネールの機知において抑圧され消失した語として、ある箇所では「familier」だと語り、別の箇所では「famille」と語っている(S.V, 53, 55)。「familier」は、「famillionnaire」へ圧縮された二つの語「familière」と「millionnaire」のうち、「familière(馴染みある、家族のような)」の男性単数形でもある。「familier」と「famille」はそれぞれ形容詞と名詞であり、品詞に違いがあるものの、意味的に同じグループに属するため、一括りに扱われていると思われる⁽¹⁴⁾。第二に、ファミリオネールと眠れるボアズにおいて二つ目の分数の分母に示した「?」は、ラカンによって明示されていないものであることを意味している。

まずはラカン自身が詳細に解説しているシニョレリから始めて順番に、これらの定式化が持つ意味と隠喩の機制を確認しよう。

シニョレリの定式のうち、「X」は隠喩的創造が行われなかったことを意味している(S.V, 58)。「Herr」は死と性に関連するものとして、フロイトに度忘れを引き起こす原因となったものである。これはアテレにおける「恐怖terreur」も同様であり、いわば直視することができないものである。それゆえ、この「Herr」は〈死〉そのものではなく、あくまでも死の「象徴」である(S.V, 57)。このことから、ラカンの分数定式が「シニフィアン/シニフィエ」の上下関係からくるものであるとしても、この分数定式に現れるすべての要素(分子にあるシニフィアンも分母にあるシニフィエとされるものも)

が、象徴としてのシニフィアンであることがわかる。したがって、やはりラカンは機知（この場合は隠喩）の機制を全面的にシニフィアンの操作の次元で説明しようとしていたと考えるべきである。

そして、ラカンによれば、「Herr」と「Signor」の間には「置き換え substitution」の関係があり、「Signor」が「エテロニム（翻訳上の等価語）hétéronyme」の関係にある「Herr」へと置き換えられている（S.V, 40）。同様にアテレでは「terre」が「terreur」と「同形意義（同音異義）homonymie」の関係にあり（S.V, 60）、「terreur」が「terre」へと置き換えられている。したがって、分数定式の分母と分子という上下関係は、この二項の間に「置き換え」の関係があり、分子が置き換えるもの、分母が置き換えられるものであることを意味していると考えられる。また、置き換えが起こりうる関係は、「同形意義」「エテロニム」など複数ある。さらに、死の象徴である二つ目の分数の分母が分子へと置き換えが起こると、そこには直視できないもの（すなわち〈死〉）の「飼い慣らし apprivoisement」が生じ、その威力が和らげられるともいわれる（S.V, 34, 41）。置き換えはそれ自体が隠喩であるわけではないことをラカンは強調するが（S.V, 39-40）、しかし隠喩の条件が置き換えにあることを思い合わせると、隠喩が起こる動因には直視できないものの威力の緩和があると考えることができる。

このようにみてくると、隠喩の分数定式に分数が二つ存在することは、置き換えが（少なくとも）二回起こったことを意味していると考えられる。つまり「Herr」が「Signor」に置き換えられ、さらに「Signor」が「X」に置き換えられるという、置き換えの時系列を描くことが可能である。さらに敷衍すると次のように言える。ある根源的な〈死〉、直視できないものの威力を緩和するために、それが象徴化を受ける。だがその象徴は同形意義やエテロニムの関係にある別の象徴に置き換えられ、その置き換えにおいて隠喩的創造が行われる。そしてその隠喩的創造物が風化すると、新たな象徴によって置き換えられ、隠喩が繰り返されていく。根源的な〈死〉（二つ目の分数の分母）は、それらの中間的な象徴（約分される）を乗り越えて、常に新しい隠喩的創造物のシニフィエとして付着してくる（掛け算の結果生じる分数）。

2-2 「抑圧」と「禁圧」

あらかじめ述べていたように、ラカンにおける「抑圧 verdrängt」と「禁圧 unterdrückt」の区別が必要である。ラカンによれば、フロイト自身はこの二つの言葉を「曖昧な仕方を用いている」（S.V, 39）が、ラカンはこれを明確に区別している。その区別にしたがえば、「Herr」は「禁圧」されたものであり、「Signor」は「抑圧」されたものである（S.V, 40-41）。したがって、分数定式の「約分」による消失は「抑圧」に対応することになる。これに対して、定式の二つ目の分数の分母にある根源的な〈死〉、直視できないものは「禁圧」される運命にあると考えられる⁽¹⁵⁾。

くわえて、ラカンが「換喩的対象のくず les débris de l'objet métonymique」と呼ぶものを考慮に入れることで、シニョレリの機制をより精緻化することができる。ラカンは「隠喩的創造がある対象に反射する際の、あらゆる普通のくずや残骸 tous les débris ou déchets ordinaires」（S.V, 52）という言い方をしている。隠喩的創造に際しては語の解体があり、その解体の結果「くずや残骸」が発生するという。シニョレリにおいては、「Herr」の置き換えられた形態である「Signor」が抑圧され消失したことで、「Signor」をその部分とする「Signorelli」が解体を被る。また、「Herr（ヘル）」も禁圧を受けて「下

へ落ちる *tombé dans les dessous*」ため (S.V, 39, 42)、「ヘルツェゴヴィナとボスニア *Herzegowina und Bosnien*」も解体を被る。この解体の結果、消えた *Signor* と *Herr* 以外の、残った部分がどうなるか。この残余の部分が「換喩的対象のくず」として表面に浮上してくる。

「換喩的対象 *l'objet métonymique*」という表現について付言しておく。隠喩と換喩の理論はラカンがセミネール第3巻の時期にヤコブソンの失語症論⁽¹⁶⁾からその発想を受け取ったものである。ある語と別の語が換喩的關係にあるとは、その二つの語が隣接的關係にあること、つまり語りにおけるシニフィアン連鎖の中で統辞的（シンタグマティック）な繋がりを持つということである。ヤコブソンの挙げる例を用いるなら、「パイプを吸う *to smoke a pipe*」という一連の言い回しにおいて隣接している「*smoke*」と「*pipe*」は換喩的關係にあり、（別の表現などで）「*pipe*」と言う代わりに「*smoke*」と言うことが換喩となる⁽¹⁷⁾。これをシニョレリの例に適用すると、「ヘルツェゴビナとボスニア」という文句が一連の統辞的な流れを持つ言い回しであれば、「ボスニア」という言葉は「ヘルツェゴビナ」の換喩となりうる。それが一つの語の中のシラブルの水準で見ると、「*Signorelli*」の中の「*elli*」は、それと連続する「*Signor*」の換喩といえる。換喩的「対象」は「*Signor*」や「*Herr*」であり、これら対象の「換喩」は「*elli*」や「*Bo [snia]*」である。したがって、「*Bo*」や「*elli*」が、隠喩形成の際に消失したものによる解体の副産物として生じた「換喩的対象のくず」となる (S.V, 39)。これらの副産物は、別の要素と結合して表面に現れる。つまり「*elli*」は「ボッティチェリ」になり、「*Bo*」は「ボッティチェリ」および「ボルトラフィオ」となった。分析家は、これら表面に現れた換喩的対象のくず、瓦礫を手がかりにして、無意識においてどのような過程があったのかを逆方向から探っていくことになる。

こうして、われわれは、諸先行研究において軽視されていた、「禁圧」「抑圧」「忘却」の区別を明確にすることができる。「禁圧」は根源的な〈死〉にはたらくものであり、二つ目の分数の分母の位置に関わる。「抑圧」は一つ目の分数の分母および二つ目の分数の分子にはたらくもので、分数定式の掛け算における「約分」に対応する。そして、抑圧＝消失することによって言葉が解体を受けるということが「忘却」にあたる。繰り返すが、ラカンは「*Signor*」が抑圧されることと「*Signorelli*」が忘却されることは別のことを強調している (S.V, 57)。たしかに抑圧は語の解体を引き起こし、語が解体することでその語は忘却を被るが、抑圧そのものと忘却は別の事象である。そして、語が解体され忘却されるとともに、抑圧部分以外の部分が「換喩的対象のくず」として表面に浮上する。

2-3 無意識のプロセスの再構成

シニョレリの例について、無意識のプロセスを段階ごとに再構成するなら、次のようになるだろう。

- ① 〈死〉の象徴である「*Herr*」が禁圧される。
- ② 「*Herr*」の置き換え（エテロニム）である「*Signor*」が抑圧される。
- ③ 「*Signor*」の抑圧（消失）により「*Signorelli*」が解体を被る。
- ④ 解体の結果「*Signorelli*」は忘却され、換喩的対象のくずである「*elli*」および「*Bo*」が別の要素と結合して浮上する。隠喩創造物は到来しない。

この段階ごとの整理を、アテレ、ファミリオネール、眠れるボアズにそれぞれ適用し、検討しよう。

アテレの解釈にあたっては、われわれは一つの困難に突き当たる。なぜなら、アテレはファミリオネールの機知とパラレルに、隠喩の例として挙げら

れているにもかかわらず、そこにファミリーオネールのような新語創造が存在しないように見えるからである。アテレにおいて生じているのは、むしろ既存の語が新たな意味（ニュアンス）を獲得するという事態である。だが、ラカンはこの事例をも「置き換え」の観点から捉えており、そこでは「abattu」から「atterré」への置き換えという隠喩があるとされる（S.V, 32）。しかし、「atterré」はボシュエの時代にはもとの「terre」のニュアンスを保持していたのである（S.V, 32）。新語の創造と新たな意味の獲得をどのように折り合わせて理解できるだろうか。そこでわれわれは次のような解釈を行う。ここには二種類の「atterré」がある。つまり、「terre」の意味を持っていた旧「atterré」と、「terreur」の意味を持った新「atterré」である。新たな意味の獲得においては、かつての意味の語を、新たな意味の同じ語で置き換えるということが起こっているのではないか。こう考えれば、一見すると語の形が変わっていないように見える「atterré」の例を、ファミリーオネールの例と同様に考えることができる。したがって、シニョレリの例と同様にアテレにおける無意識のプロセスを次のように整理できる。

- ①〈恐怖〉の象徴である「terreur」が禁圧される。
- ②「terreur」の置き換え（同形意義）である「terre」が抑圧される。
- ③「terre」の抑圧（消失）により「atterré」が解体を被る。
- ④解体の結果、terre の意味を持つ「atterré（ラカンは abattu と仮称する）」が忘却され、そこに再び新しい意味を持つ「atterré」が隠喩的に創造される。

ファミリーオネールの機知については次のようになる。なお、ラカンによって明示されていない項は空欄で示す。

- ①〈 〉の象徴である「？」が禁圧される。
- ②「？」の置き換え（ ）である「familier-famille」が抑圧される。
- ③「familier-famille」の抑圧（消失）により「 」が解体を被る。
- ④解体の結果、familier-famille の意味を持つ「 」が忘却され、「famillionnaire」が隠喩的に創造される。

この例では、隠喩的創造が行われる起点となった元の言葉は、抑圧される「familier-famille」を一部とするより大きな語ではなく、「familier-famille」の全体である。したがって、解体による忘却は起こっていない。しかし、それにもかかわらず新語創造において「famill」という語形は再び現れており、これが「millionnaire」と圧縮されて「famillionnaire」を合成している。しかし、この隠喩的創造において再び現れた「famill」は、もとの「famille」の意味ではない、新しい意味を帯びているはずである。したがって、この例はアテレと同じように旧い意味の語を新しい意味の同じ語（形）で置き換えるということが起こっていると考えられる。しかし、アテレとは異なってさらに「millionnaire」との圧縮が生じている。

眠れるボアズについては次のようになる。

- ①〈 〉の象徴である「？」が禁圧される。
- ②「？」の置き換え（ ）である「ボアズ」が抑圧される。
- ③「ボアズ」の抑圧（消失）により「 」が解体を被る。
- ④「ボアズ」は「彼の麦束 sa gerbe」に置き換えられ、この「彼の麦束」が新たな意味を帯びることになる。

この例ではファミリーオネールの例と同じく、元の言葉の解体は起きておらず、元の言葉「ボアズ」の全体が置き換えられ、抑圧を受けている。したがって解体による忘却は起きていない。だが、アテレと異なるのは、われわれがヴィクトル・ユゴーのこの詩を読むときに、必ずしもこの「ボアズ」につ

いて考えないことはないという点である。ラカンが言うように、「*atterré*」についてわれわれはもはや語源の「*terre*」を意識することはない（S.V, 55）。しかしわれわれがこの詩を読むときには、「彼の麦束」が明らかに「ボアズ」を置き換えたものであることを把握する。この問題については、ファミリーオネールとの共通性を考えることで解釈可能であろう。すなわち、ファミリーオネールの機知においてもわれわれはそこに圧縮された素材としての「*familier*」を読み取ることが可能であるが、この「*famillionnaire*」が時代とともに日常語としてランガージュに定着した場合、もはや「*familier*」の意味を読み取ることがなくなるだろうということである。同様に、「彼の麦束」もまた、それが詩的運用を超えて日常語になったとすれば、その時代の人々はもはやそこに置き換えられた「ボアズ」を見ることはなく、「麦束」を全く新しいニュアンスを持つ語として見ているだろう（逆に、抑圧された語を再び発掘するのが分析の作業である）。

アテレ、ファミリーオネール、眠れるボアズを比較すると、古い語の置き換えについて、三つの段階的な差異を見出すことができる。つまり、アテレは古い語を全く同じ語（しかし新しい意味を持つ）で置き換えており、ファミリーオネールでは古い語を、その語に改変を加えた新しい語（「*familier*」の語形は保存されているが「*millionnaire*」が付加されている）で置き換えており、眠れるボアズでは古い語を全く別の既存の語で置き換えている。その結果、アテレと眠れるボアズは別の経路を通して既存の語の新たな意味獲得が生じており、語の改変が生じたファミリーオネールにおいてのみ新語創造が起きている。

以上を踏まえて、シニョレリ、アテレ、ファミリーオネール、眠れるボアズを、「解体（忘却）」と「新たな意味の獲得」という二つのカテゴリーが取りうる四つの組み合わせに当てはめて、次のように整理することができる（下表）。なお、「解体（忘却）」が「-」であるのは、抑圧される要素が元の語の一部ではなく全体に及んでいることを意味している。また、「新たな意味の獲得」が「+」であるファミリーオネールとシニョレリには、新語が創造されたか否かという結果の違いがある。

	シニョレリ	アテレ	ファミリーオネール	眠れるボアズ
解体（忘却）	+	+	-	-
新たな意味の獲得	-	+	-	+

おわりに

本稿では、フロイト『機知』をラカンが解釈するセミネール第5巻の議論について、諸先行研究の批判的検討と「隠喩」の機制の再構成・再整理を試みた。先行研究においては、とくに「抑圧」と「禁圧」の違いが見落とされていたために、隠喩の定式に関する厳密な認識を構築できなかったことが明らかになった。また、シニョレリ、アテレ、ファミリーオネール、眠れるボアズを比較することで、これらを隠喩の四つのヴァリエーションに分類することができた。この整理を基盤にして、今後の研究が改めてラカンのテクストを厳密に捉え直すことが望まれる。

本稿が扱えなかった課題はいくつもある。たとえば、「抑圧」と「禁圧」がそれぞれどのような過程であるかはさらに多面的に考察される必要がある。また、眠れるボアズについては、セミネール第3巻や『エクリ』の「文字の審級」など、さらに広くラカンのテクストを検討する余地が残されている。

そして、本稿に続いて取り組むべき研究は「換喩」の機制であり、そこから隠喩と換喩を総合した言語理論や、「欲望のグラフ」解釈に進む必要がある。さらにその先には、隠喩を「症状」、換喩を「欲望」と見るラカンの精神分析理論全体へと、その厳密性を保持しながら拡張していかなければならない。

注釈

(1) 四つの隠喩事例の内容については次の網羅的かつ簡潔な紹介を参照のこと。cf. 佐々木 (1984), pp. 162-203 および Blanco (2002), pp. 87-8.

(2) cf. Blanco (2002), p. 87

(3) cf. Blanco (2002), p. 86

(4) 原 (2002), p. 104

(5) 川崎 (2007), p. 122

(6) 川崎 (2007), p. 123

(7) cf. 川崎 (2007), p. 125

(8) 川崎 (2007), p. 125

(9) 川崎 (2007), p. 125

(10) 川崎 (2007), p. 126

(11) 片山 (2012), p. 29

(12) 片山 (2012), p. 36

(13) 片山 (2012), pp. 36-7

(14) 片山もまた「familierあるいはfamille」と一括している。片山(2012)、p. 36。

(15) ラカンはセミネール1巻および3巻でも「抑圧」と「禁圧」の区別について触れている (cf. S.I, 65, S.III, 57)。ただし、11巻でラカンが「禁圧 *Unterdrückung*」について論じる中で、『Signor』、『Herr』という言葉は下へ移行する *passe dans les dessous*」とも言われており、あたかも「Signor」と「Herr」の両方が「禁圧」されるかのようである (S.XI, 29)。本稿ではさしあたり、セミネール5巻までの議論に限定して読解を進める。

(16) cf. 「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances」(1956)、ヤコブソン (1993[1973]) pp. 21-44

(17) cf. ヤコブソン (1993[1973])、p. 34。とはいえ、ラカンにおける「換喩」の内実についてはいまだ解釈の分かれるところである。片山は「famille」が「familière」と「millionnaire」の双方に対して「換喩的な隣接関係にある」と述べている。cf. 片山 (2012)、p. 27。我々のとる観点からは、これらはむしろ同形意義の関係にあり、置き換えの関係にあるという意味で、隠喩的な相似的関係にあることになる。

文献表

・Freud, S. (1948[1940]). *Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten. Gesammelte Werke*. VI. Imago Publishing. 邦訳：ジグムント・フロイト (1971[1970]) (生松敬三訳)「機知--その無意識との関係--」、『フロイト著作集4』所収、人文書院

・Lacan, J. (1981). *Les Psychoses. Le Séminaire livre III* (1955-1956). Seuil. 邦訳：ジャック・ラカン (1996[1987]) (ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳)『精神病【下】』、岩波書店

・Lacan, J. (1998). *Les formations de l'inconscient. Le Séminaire livre V* (1957-1958). Seuil. 邦訳：ジャック・ラカン (2005) (ジャック＝アラン・

ミレール編，佐々木孝次・原和之・川崎惣一訳）『無識の形成物【上】』、岩波書店

・Lacan, J. (1973). *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse. Le Séminaire livre XI* (1964). Seuil. 邦訳：ジャック・ラカン（2022[2020]）（ジャック＝アラン・ミレール編，小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳）『精神分析の四期本概念【上】』、岩波文庫

・Blanco, M. (2002). Le trait d'esprit de Freud à Lacan. *Savoirs et clinique*, 1(1), 75-96.

・ロマーン・ヤコブソン（1993[1973]）（川本茂雄 監修）『一般言語学』、みすず書房

・佐々木孝次（1984）『ラカンの世界』、弘文堂

・原和之（2002）『ラカン 哲学空間のエクソダス』、講談社選書メチエ

・川崎惣一（2007）「無意識のシニフィアンの構造 --機知のラカンの解釈について--」、城西国際大学紀要、城西国際大学紀要委員会 編 15(3), 119-131.

・片山文保（2012）「機知と他者 --フロイト・ラカンの機知論について--」、明星大学研究紀要-人文学部、明星大学人文学部研究紀要編集委員会 編 48, 19-38.